

2023 年度 個人研究実績・成果報告書

2024 年 4 月 22 日

所属	サービス創造学部	職名	教授	氏名	西尾 淳
研究課題	芸術と商業文化				
研究キーワード	芸術と商業文化・芸術性、 哲学	当年度計画に対する 達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの 成果が達成できた		
関連する SDGs項目	9. 産業と技術革新の基 盤をつくろう	11. 住み続けられるまち づくりを	12. つくる責任 つかう 責任	13. 気候変動に具体的な 対策を	

1. 研究成果の概要

2023 年度の研究実施計画書では私が担当している基盤教育機構の「芸術と商業文化」において本学の学生のサステイナブル社会への目線をより一層広げようと試みた点に論及した。実際、千葉商科大学が遠藤隆吉先生の治道家の精神を核とした、大局的な見地に立つ、時代の変化を捉える、社会の課題を解決できる、高い倫理観を持つという 4 つの点はまさにサステイナブル社会に生きる学生にとって必要な力である。例えば、大局的な見地に立つということはこれまで学生自らが獲得してきた主観的精神を相対化し、客観的な目線を獲得することを意味する。このような客観的な目線を持つことは客観的精神を涵養することであり、だからこそ千葉商科大学の教育は自らを主観的精神から客観的精神へ目線を転換する重要なキーとなるのである。私はこの視点を重視し「芸術と商業文化」でこの目線の転換を学生に促すことに注力した。

一方で、この目線の転換のためには一定の教養が必要となる。教養教育は高校までの教育とは異なる。高校教育は文部科学省の意向に沿った指導要領に準拠している。もちろんその高校教育の中で教養が養われないということではない。高校の先生方は自らの教育現場において高校生に知識を授けるだけでなく、教養を育てる努力を日々されている。しかし、大学教育においては高校における指導要領を基礎に、知の新たな可能性を学生らに開花させる教育の場を提供する。私はその意味で「芸術と商業文化」の中で自らが獲得した芸術の力を最大限学生に伝えてきたのである。

では芸術とは一体何であろうか。これが私の研究の核心である。芸術は有史以来先人が獲得してきた形而上学の領域に存在する。それは先人が天と地を結びつける重要な知の技法と考えてきたものである。つまり、芸術は哲学の最高領域であり、それは人間の魂に直接感動として影響を及ぼすものである。そしてその感動という心の揺さぶりこそが人生の最終目的である幸福へと導くのだ。これは、プラトン哲学の基本であり、先人たちはだからこそ芸術の重要性を 2400 年の間、教養という形で強調してきたのである。

このように考えると、遠藤先生の大局的な見地に立つといった言葉は学生らをして教養を身につけさせることによって初めて可能となる。これによって、学生らは主観的精神を相対化する客観的精神を獲得し、そのうえで大局的な見地に到達することになる。これが私が 2023 年において教育現場から得られた研究成果なのである。つまり、私は、この一年間での教育活動を通じて、全学部の学生に治道家の精神の一角をなす大局的な見地への促しへと結びつけることができたと考えている。そういった主観的精神から客観的精神への移行が市場原理からサステイナブル社会へ移行していく時代の変化を捉えるといった治道家の精神の第 2 の点に広がりを持たせることができるのである。

私が 2023 年の研究成果の中でもう一つ獲得した成果は変化の意味である。変化とは遠藤先生が目にしたヘラクレイトスの万物流転に依拠するものであるが、ここで言う変化とは無作為の変化を意味しない。その変化はプラスとマイナスといった引力と斥力といった二律背反の連関の意味を含意している。この引力と斥力の関係は人間関係だけでなく企業間関係あるいは国家間関係にも通じるものである。

また、この変化には血族と実力といった考えが含まれている。血族とは、脈々と流れている伝統と格式によ

って形成されるものであり、それは時代とともに権威を積み重ねていくものである。この血族に対して、血族に頼らない力に依拠し、独立していく変化がある。それが実力である。この相対する血族と血族によることのない独立した実力の相克が実は人間関係あるいは企業間関係、国家間関係に通じるものである。

後者は特にニコロ・マキャヴェリが「徳 Virtù」(=力量)と位置づけるものである。マキャヴェリは分裂・抗争が続き、権謀術数が渦巻く15～16世紀のイタリア半島の現状に直面し、権力の本質が血族に由来するのではなく、君主の実力に依拠すると主張した。だからこそ、マキャヴェリは君主は国家体制を維持するために、道徳を無視し、冷徹に人を殺すことができると述べたのである。ここでマキャヴェリが明らかにしたことは政治の本質が権力闘争だということであり、このようなリアリズムが現代政治学の出発点となった。しかし、我が国の天皇や英国をはじめとするヨーロッパ諸国の国王は、その血族によって国民統合の象徴となっていた経緯に鑑みれば、国家の存立は必ずしも実力のみで依拠するものではない。

つまり遠藤先生が捉えたヘラクレイトスの変化とは、プラスとマイナスを彩るものであると同時に血族とそこからの独立を示すものを含意している。つまり時代の変化を捉えるとは、変化の意味をしっかりと把握することなのである。このように考えると、変化をとらえるとは、自己から離れた社会との関係を共有できる主観的精神から客観的精神へ成長していく精神的自立にはほかならない。そして、このような客観的精神を備えて初めてSDGsのような社会課題が可能となる。というのは、課題解決のためには、他者との合意形成が不可欠だからである。私の講義にはこの課題解決の意味も含意されておりそれが治道家の精神を涵養していく大きな原動力となることは間違いない。

最後に、倫理の問題であるが先に述べた大局的見地、時代の変化を捉える、そして課題解決を行うためには、主観的精神から客観的精神への成長を必要とする。そのためには、善なる精神を貫く道徳的目線な観点が学生一人一人において養わなければならない。このように考えると、遠藤先生が治道家の精神をもって商業文化を整えようとした点がよく理解できる。つまり我々に倫理性が担保できなければ治道家の精神は瓦解してしまうのである。これを私はヘーゲルの絶対的精神とおきたい。

以上より私の「芸術と商業文化」の研究と教育はヘーゲル理論の持つ主観的精神から客観的精神、客観的精神から絶対的精神への成長の促しが遠藤先生の治道家の精神と結びつくことを明らかにしたのである。

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

2024年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【著書・論文（査読なし）】

2024年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【学会発表等】

特に無し。

3. 主な経費

2023年度の研究計画書に沿って適切に支出した。

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

特に無し。

(本文は2ページ以内にまとめること)